

語りの生成の場としての質的研究の臨床的意義

ー臨床心理学における質的研究と心理臨床の差異と重なりに着目してー

野田 実希

1. はじめに

語り (narrative) は、われわれ人間の在りように対する理解の手がかりとして、心理学、社会学、歴史学、文化人類学など多様な領域において研究の対象とされてきた。心理学においては、1970年代頃に「ナラティヴへの転回 (narrative turn)」と呼ばれる現象が生じ、ナラティヴ——語りへの関心が高まってきたと言われている (McLeod, 2000/2007)。臨床心理学においても、語りは精神分析を中心に心理療法の分析対象として以前から注目されていたが、近年では、家族療法のなかで初期の発展を見たナラティヴ・セラピー (narrative therapy) が着目されている。

臨床心理学は、1896年に Witmer, L.によって提唱されて以来、人生の困難や苦しみを抱える人に対して、その人の心や在りようを理解し、援助するための実践的な学問として発展してきた。そのための研究として、個性記述的なアプローチに基づく事例研究と法則定立的なアプローチに基づく定量研究の2つの対極ともいえる方向性をもつ研究が行なわれてきた。近年では、これに加えて、当事者の体験世界を体系的に探索するための手法として、質的研究が用いられるようになってきたと言われている (やまだ, 2013)。質的研究は、世界がどのように構成されているのかについての理解を深めることを目的としている (McLeod, 2000/2007)¹。そのなかで語りに着目すると、調査面接を行なって当事者の語りを聴き、発話データを分析することで、その人を理解しようと試みる手法が広く用いられている。

しかしここで、臨床心理学における質的研究の独自性や意義はどこにあるのだろうかという疑問が生じる。臨床心理学、なかでも心理臨床面接では、悩みを抱えた人の心に寄り添い、その語りを聴くことで発見的な過程をともにするが、これは質的研究のアプローチにおいても重視されている。それでは何故、臨床心理学においてあらためて質的研究を行なう必要があるのだろうか。そこで本稿では、語りの生成の場という観点から質的研究を捉え、臨床心理学における質的研究の意義について検討するために、心理臨床における語りとの差異と重なりに着目しながら論じたい。

なお、前述のとおり、質的研究にもさまざまな理論的立場や手法が存在するが、本稿では関係性のなかで生まれる、語りの生成の場としての質的研究の意義について考察するため、質的

¹ 質的研究のなかにも、さまざまな立場やアプローチがあり、またその対象は、面接による口頭データや、観察や写真などによる視覚データ、文書資料などの記述データなど多様であるが (Flick, 2007/2011)、その内容や特徴が記述され、テキスト化されたものが分析対象となる点では共通している。

研究のなかでも、特に二者関係での語りを対象とした調査面接について焦点を当てる。調査面接のなかでも、構造化面接、半構造化面接、非構造化面接があり、それぞれ自由度は異なるが、ここでは、構造化された場におけるデータ収集ではなく、半構造化面接や非構造化面接など、ある程度自由度の高い面接を前提としている。同様に、心理臨床面接のなかでも、さまざまな学派や理論があるが、「心理療法とは、悩みや問題の解決のために来談した人に対して、専門的な訓練を受けた者が、主として心理的な接近法によって、可能な限り来談者の全存在に対する配慮をもちつつ、来談者が人生の過程を発見的に歩むのを援助すること」という河合(1992, p.3)の定義に倣いたい。面接の形態についても、家族療法や集団療法を含めるときわめて多岐にわたるため、一括りに論じることとはできないが、本稿では一対一の個別面接を基本とする心理療法について論じることとする。また本稿では、語りを、ストーリー (story) や物語、ナラティブ(narrative)といった概念で説明される(McLeod, 1997/2007)ばかりでなく、人が語る(narrating)という行為的な側面(森岡, 2002; 能智, 2006)も含んで捉えることとする。

2. 調査面接と臨床面接における語りの差異

質的研究における調査面接と心理臨床における臨床面接には、目的とするものやアプローチの方法を含め、基本的な差異があることについて、はじめに整理しておきたい。まず、面接の対象者についてであるが、質的研究では、研究者が関心を寄せる特定のカテゴリに属する人を対象とするため、研究者が設定したリサーチ・クエスチョンに対して、十分に情報を提供してくれる協力者(インフォーマント)を選定する。そのため語り手は、例えば「〇〇症の人」や「〇〇を体験した人」といったように、あらかじめ研究者によってラベリングされている。一方、心理臨床では、「悩みや問題の解決のために来談した人」(河合, 1992)と出会うため、対象者はセラピストが設定したテーマに基づいて選定されているわけでもなく、また、セラピストの関心によって事前にラベリングされているわけでもない。心理臨床では、セラピストが設定したテーマに基づいてクライエントが自己定義して語ることを求められるのでもないことは、質的研究との差異を考えるうえで重要である。このことは、語りをどのように聞くかについての聞き手の態度の差異にも関わる。質的研究の立場から調査面接と臨床面接における聴く技法や態度の違いを見てみると、調査面接²では、調査者が主導して話を聞きだすための「問う」技法が重要であるのに対し、臨床面接では、効果的な介入や援助を心がけてクライエントの語りを「聞く」技法が重要であることが指摘されている(やまだ, 2007; 山口, 2006)。

次に、語り手はどのような意図をもって語るのか、また聞き手はどのような目的で語りを聴くのかといったことについて見てみよう。調査面接では、語り手は研究の趣旨に同意し、調査に協力するという形で面接場面を訪れる。語りは言語活動である限り、他者の存在が前提となっているが(Bakhtin, 1986/1988; 藤本, 2003; 岩野, 2010)、特に調査面接では、語り手は第三者に聞かれることを意識して語るという構造を有している。そうして物語が他の誰かに対して語られるという一面をもつとき、個人の私密的な「わたし」の語りはある種の公共性を帯びる

² 調査面接は、前述したように、構造化面接、半構造化面接、非構造化面接があり、それぞれ自由度は異なるものの、調査者/研究者のリサーチ・クエスチョンに基づいて調査が行なわれるという構造上、そこで聴きとられる語りはある一定の水路づけがなされることになる。

ようになる。そうした物語り（narrating）の相互性のなかで、語り手は自らを他者の自己形成の導きとしてさしだすのである（Frank, 1995/2002）。つまり、調査への協力にあたっては、自らの体験を証言することによって、他者に還元したいという願いや、社会の制度や支配的な言説に対する訴えに動機づけられているとも考えられる。そして聞き手である調査者/研究者は、ある現象を生きる対象者がどのような体験をしているのかについて理解することを、もっぱらの目的とする。一方、臨床面接では、基本的にはクライアントが話したいことを何でも自由に話してもらい、クライアントは自身の悩みや問題をきっかけとして来談しているのであり、そこでの語りは、第三者に向けて語られるのではなく、自分自身のために、目の前のセラピストに向けて語られる。そのため語りは、二者関係においてのみ共有される、きわめて私秘的なものである。また、その個人への理解が目指され、クライアントの問題解決はどのようにすればよいのか、何が有効かという有効性が問題になる（山口、2006）。

面接で語られた後の記録の取り扱いや語りに対するアプローチについては、質的研究では、語りは発話データとして記録・録音されたものが書き起こされ、テキストとして分析される。質的研究には、さまざまな分析手法があるが、主に語られた内容に着目するカテゴリ分析と、語り方や文脈に着目するシーケンス分析がある。前者は語りを切片に分けて分類し、概念を抽出する手法であり、後者は語りの構造を詳細に分析して語りを再構成する手法である。ここでの語り手・聞き手の関係の位相は、研究者の視点からテキスト化された語りと相対するという関係へと変化することが指摘されている（藤本、2003）。一方、心理臨床では、語りは分析データとして書き起こされるというよりは、セラピストの記録という形で残される。そこでは、セラピストによって心に留められた語りが二次的に書き留められるという点において、クライアントの語りだけではなく、臨床面接で生じたことについてのセラピストの理解が書き記される。

3. 体験を語るということ

「今・ここ」で生み出される語り

ここまで述べてきたように、調査面接と臨床面接には目的や態度などの基本的な差異があるが、語るということ（narrating）という発話行為としての側面に着目するならば、そこには共通性があることが見えてくる。Bakhtin（1984）の多声性の概念によれば、人の心には複数の声が内在しており、語りとして表現されるためには、一つの声として編み上げられる必要がある。その過程には、ある出来事や心情が意識的に取捨選択されたり、意図せずに隠蔽されたり、ふいに口をついて出たりするなど、語り手のなかにさまざまな心の動きが生じる。このように語りの生成の場として質的研究を捉えたとき、調査面接においても臨床面接においても、今まさにその場で、当事者の体験についての想いが言葉になるという点において両者の重なりが見てとれる。リアルな体験の前では、語りは止まらざるをえなくなり、人は次の言葉を探し求めようとするが、諸富（2005）はこれを「体験の辺縁」と呼び、そうした過程にこそ生きた言葉や新たな言葉が生まれると述べている。また山口（2006）は、ライフストーリー研究と心理療法を比較し、人々が出来事をどのように語り、経験として意味づけるのか、どのような状況で意味づけが変容するのかは共通の関心であり、両者とも言葉にならないものが語られ、経験とし

て意味づけられ、再構成されていく過程を重視していると指摘している。ナラティブ・セラピーにおいて、出来事には「未完了」の部分があると捉えられており（森岡，2005），語り研究においては語りの変化可能性（やまだ，2007），すなわち新たな語りの生成可能性が指摘されている。

しかし、これらの論において「語りえないこと」は、「いまだ語られていないもの」「いずれ語られるべきもの」として否定的に捉えられてしまっていないだろうか。語ろうとしても語れないことを抱える主体、あるいは、語りえないということを語ろうとしている主体の在りようにも思いを寄せる必要はないだろうか。このことについては、本稿の最後で再び論じたい。

語り手と聞き手による共同生成としての語り

一人語りのモノローグや内言とは異なり、語りが面接の場における「今・ここ」で生み出されるためには、それを聴く聞き手が存在している必要がある。調査面接においても臨床面接においても、語りは語り手と聞き手との関係性によって生まれることが多くの論者によって指摘されており（McLeod, 2000/2007；森岡，2007；能智，2006），ここでも両者の共通点が見いだされる。

この点に関して、まず、質的研究の場で語られる語りがどのように捉えられているのかについて整理する。Flick（2007/2011）によると、質的研究では、発話データを実際に起こったことの再現または表象と見なす立場と、主観的もしくは社会的に構成される表現様式と見なす立場がある。社会構成主義的な立場からは後者の見方が支持されており、調査面接は社会的現実の再構成の場であり、そこで生み出される語りは語り手と聞き手の対話的な構築物であると考えられている（山口，2006）。この考えに基づくと、語りは語り手の心の内に既に形成されたものの表出ではなく、能智（2006）が、「人は常に、何かを発話することで、聞き手に対して何ごとかを行おうとしており、そういう点から言うと、“ナラティブ”は、過去に生じた出来事を表現していたとしても、あくまで『今・ここ』の行為」（p.51）であると述べているように、語り手と聞き手がともにいる、その場の関係性によって生じるものであるといえる。調査面接において、語りのオーナーシップは語り手のみに帰属されるものではなく、面接者も「その一端を担う存在と位置づけられる」（遠藤，2006）と指摘されているように、面接者としての聞き手も語りの共同生成者であることを十分に意識しておく必要がある。

他方、心理臨床では、共同作業や間主観性の概念に代表されるように、質的研究に比べると、語りにおける共同性が古くから強調されている。これに関して山口（2001）は、心理臨床においては、語られる物語を媒介として語り手と聞き手との間に関係性が生じ、物語は耳を傾ける聞き手を織り込みながら展開すると指摘しており、森岡（2007）は、そのような場にこそ治療的な意味が生じると強調している。前章で述べたように、心理臨床は人の心の問題への援助に関わる実践活動であるため、心理臨床における共同生成は、単に語りを理解するために耳を傾けることを意味するのではなく、その物語を生きるように聴き（皆藤，2010），そうして語り手自身が自分の物語を生きることができるよう促していくという、心の動きやその過程が強調されてもいる。

語る「わたし」との出会い

調査面接においても臨床面接においても、語るという発話行為自体が、語り手の内に新たな体験を生じさせている。そして、そこで語られた自己——物語的自己 (narrative self) を通して、人は自己を理解し生きることになる (Anderson & Goolishian, 1992/1997)。すなわち、高橋 (2012) が指摘するように、語ることを通して、「わたし」という自己アイデンティティが生まれるのである。体験を語ることは、語り手と聞き手との共同生成という側面をもつことを見てきたが、それは同時に、語り手が語りとして表出された自身の想いや体験のすがたを発見し、さらにそのように語る「わたし」との差異化が生じていく営みでもある。

自己が自己を語る時、「語る自己」と「語られた自己」という自己の二重性が生じることは、言語学や物語論の分野においても指摘されている (高橋, 2012)。森岡 (2007) は、心理療法における自己の二重性について指摘し、「自己を語ることを通して、人は語りを聞くということと語りのなかにいるということを同時に行っている」 (p.259) と述べている。聞き手に向けて語りが語られるとき、語り手自身の内にも聞き手としての「わたし」が生じ、語りはそのような「わたし」に向けても語られ、同時に受けとられる体験にもなる。そしてまた、語り手が過去の体験を語りながら、「過去にそうであったわたし」と「今あなたの前で語るわたし」が見いだされていくとき、「語るわたし」の主体が立ち上がっていくと考えられる。つまり、聴いている「あなた」がいると感じられてはじめて、語り手は「語るわたし」に出会っているものであり、その主体生成の営みは心理臨床にも通じているといえるだろう。

面接における権威性

ここまで見てきたように、語りの発話行為としての側面に着目するのであれば、心理臨床での語りにおいても調査面接での語りにおいても、語ることにより新たな「わたし」が生成していくという共通性が浮かび上がってくる。しかし、ここにおいてこそ、調査面接が臨床面接とは異なる点が厳然と存在することについて、自覚的である必要があろう。すなわち、調査面接では、対象となる現象や、その現象を生きる人の体験世界を理解するために、「教えてもらう」という態度が基本的な構えとしてある。探索的な質的研究では、研究者のバイアスを避けるために、事前に仮説や推論を立てない立場があることも指摘されているが (Flick, 2007/2011)、それでも調査者の視点や価値観が語りに影響を与えることは免れえない。能智 (2006) は、受けとり手は自身のもつ「思考としてのナラティブ」に沿って受けとったものを整理していくと述べているが、これは語りを聴く場においても生じているであろう。つまり、語りを聴いている最中にも、語りは調査者である聞き手の「思考としてのナラティブ」に働きかけるため、それによって聞き手の応答には、おのずと変化が生じてくる。聞き手の表情や傾き、身振りや声かけのテンポなど、応答の一つ一つが、どのように語りを聴いているのかというメッセージとなり、それを受けとった語り手の語りもまた変化していくであろう。

さらに、調査面接では臨床面接とは異なり、語り手は研究の趣旨に沿って、聞き手である調査者の問いに対する応答として自らの体験や心情を語るという性質がある。藤本 (2003) は、調査面接における語りの場では、聞き手が語りをコントロールすることによって、研究者の意図や社会的文脈に沿って自己を定義して語ることを語り手に要請していると指摘している。つ

まり、調査面接は、研究者の設定したテーマに応じて自己の物語を語るように仕向けているという点において、そのような自己としてのアイデンティティを形成させてしまうという権力構造を有しているというのである。調査面接での語りは、たしかに調査者と対象者との共同性から生じてくるものであるが、そこには、調査者/研究者の意図や思惑と、語り手が調査者/研究者を前にして自己を説明しようとする、まさにそのあいだで語りが生じているという側面がある。心理臨床においても、セラピストとクライアントは、治療者－患者といったような、権威性をはらんだ上下関係に陥る危険性は自覚されており、だからこそ、セラピストはクライアントと水平の立場にいる必要性が強調されている（河合，2001）。これに対して調査面接では、調査者－調査対象者という「非対称的な関係性」（藤本，2003）が、避けえないものとして存在していることは、研究を行なうにあたって十分に自覚しておく必要がある。語りが生みだされる場においては、語り手と聞き手との共同生成という側面があるが、そこには調査のもつ権威性の課題が残されている。このことにいかに向き合っていくかという問いは、聞き手である調査者/研究者に対して、倫理的な命題として絶えず投げかけられているといえる。

4. 語りにおける応答と責任

「わたし」が「あなた」に語ること

聞き手の存在が語り手の語りに影響を与えるということ、すなわち、そこで生成される「わたし」の語りに聞き手が影響を与えてしまうという権力性が不可避であるとき、調査面接における出会いの意義、そしてそこで語られる「わたし」の意義はどこにあるのかということを問い直さざるをえない。前述のとおり、「語るわたし」の感覚は、「聞くあなた」がいてはじめて成立する。大山（2003）は、Benveniste（1966/1983）の「＜わたし＞が『わたし』と言うときは、＜わたし＞が誰かに向かって語りかけ（l'allocution）をなすときだけ」であり、「＜わたし＞と＜あなた＞という人称は、『発話する＜わたし＞』と『＜わたし＞の話しかける＜あなた＞』として、その発話の中で、そのつどそのつど生成されるもの」という論を引きながら（pp.89-90）、語るという行為は、先行してそこに存在する聞き手によって作り出されると指摘している。つまり、「あなたの語りを聴く」聞き手がいることによって、「語るわたし」の存在が立ち現れ、そうして「語るわたし」の語りは、「聞くあなた」に向けて語られるといえる。

これを質的研究における調査面接に置きかえて考えてみると、「調査に協力するわたし」が「調査者であるあなた」に向けて、体験を語り始める。そこでの「わたし」と「あなた」の関係性も、はじめから存在しているのではなく、その場において生成されるものである。質的研究における語り手は、研究の趣旨に賛同しているという点において、自身の体験を語り手に聞いてもらうために語り、第三者に発信され、受けとられることを期待しているといえる。「人々は、主にストーリーという形式で自らの経験を理解し、それを他者に伝えている」（McLeod, 2000/2007, pp.134-135）と指摘されているように、語り手の自己物語は、他者に対して伝達しようとするとき、自己の物語としてとどまるのではなく、「自己と他者の物語」（Frank, 1995/2002）となる。

さらに Frank（1995/2002）は、そうした物語を語ることは、「声」を見いだすということであり、それは過去になされたことに応答する責任を負うことであると同時に、後に続く者たちに

少しでもよい事例をもたらすことで過去に起こったことの記憶を立て直す責任をもつことであると述べている。そのとき語り手は、「聞き手であるあなた」を、目の前にいる調査者/研究者だけではなく、その語りを必要とする第三者の「あなた」にも見ていることになる。質的研究における語りは、語り手を特定のテーマについて語る者としてのアイデンティティを構成させるという権威性のなかで生み出されるものではあるが、それでもなお語り手は、自身の「生きる」在りようを他者の「生きる」に還元されることを願い、自らを差し出し、聞き手に託すことで声を見いだそうとする権威性のもとで語りは始めるからこそ、その語りはさらに広く他者に開かれた公共性をもつというパラドクスが存在しているのである。

語りを聴き、語り継ぐことの責任

心理臨床の場で語られたことは、第三者に公表されることを前提としてはいない。人が援助を求めるとき、個人の心の内に秘められた想いや思索が語りとして紡がれていく過程は、目の前にいるセラピストとの間でのみ生まれるものであるため、語りはただ二人の間でのみ共有され、生きられていく。一方、質的研究において生成される知は二者関係に限定されるものではない。松島（2007）は、語りはテキストである限り、誰かに読まれる運命にあり、新たな意味という生命を吹き込まれると述べている。また、能智（2006）は、語りは一度語られて終わるのではなく、別の人に聴きとられることによってその人のナラティブとして生き直され、新たな「産物としてのナラティブ」が生まれると指摘している。このように、質的研究における語りは一過性のものではなく、他の誰かに受け継がれ、そのつど、すがたを変えて生きられていく。自身の物語を語ることが、Frank（1995/2002）が指摘するように、自分の声を見だし、過去や記憶を立て直すことに対して責任を負うことであるならば、調査者である研究者は、語り手の「生きる」物語を公共の場に向けて語り継いでいく責任と使命を負っているといえる。そのことが質的研究における語りの倫理であり、語り手の物語が他者のために生きられるとき、語り手もまた、その物語を必要とする他者とともにいることができるのだろう。

5. 語りはどのように生きられるのか

語りと「ともにある」こと

語りの受けとり手が、語りの倫理にどのように向き合っていくかという問いは、語りがどのように聞き手に受けとめられ、生きられていくのかという問いにも関わる。インタビューを主とする質的研究では、語り手の語りを発話データとして分析するが、ここでも留意しなければならないのは、Frank（1995/2002）が述べるように、語られた語りに「ついて」理解をするのではなく、その語りと「ともに」考え、物語に参加するという姿勢である。これは心理臨床において、語りを聴くときは、物語を理解するという姿勢よりも物語を生きる姿勢が重要（皆藤、2010）と強調されていることと重なる。

質的研究における分析手法は、アプローチによって多岐にわたるが、基本的には発話データに徹底的に向き合う過程を経る。質的研究のなかでも、語りの内容に焦点を当てるカテゴリ分析は、データを細かく切り分け、脱文脈化するため、その段階で、発話の全体性や個々の対象そのもののリアリティは時に損なわれるという批判も向けられている（遠藤、2006）。例えばグ

ラウンデッド・セオリー・アプローチ (Glaser & Strauss, 1967/1996) は、分析者の主観を出来る限り排除するために、発話データを細かく切片化し、厳密な手続きを踏むことで、データ自体から浮かび上がる概念を見いだそうとする (戈木, 2013)。質的研究は、前述のとおり、発話データに向き合う過程においても研究者の価値観や主観に沿ってデータを再構成する権威性をはらんでいる。ここでも研究者の倫理が問われるわけであるが、質的研究の分析における体系的な手続きは、研究者のもつバイアスに気づくと同時に、データを多角的な視点から見つめ、データと対話するための手法であるといえる。

この点に関して Charmaz (1990) は、質的研究における発見のプロセスは、データとの対話の後で、研究者がデータに対して抱いている考えを発見することであると述べている。分析を進めていくなかで、分析者は、語りの核を捉えるためにデータを行きつ戻りつしながら、時に行き詰まりを感じる。しかし、分析者/研究者の理解が到底及ばないと思われたその先に、それまで思いもよらなかった見え方に、はっと気づかされる瞬間が訪れることがある。それは、Koch (1957/2010) が、バウムという主題との出会いに際して、「人はそこに表れたものを前にして驚いたり、しばしば衝撃を受けたりする。そして、真実にして不可解だという感じが残る」(p.20) と述べていることとも通じる。人の心の内は、本来、誰にも理解されえないものかもしれないが、それでもなお、研究者の視点に回収することなく対象を理解しようとする試みに開かれるとき、研究者のものの見方は変化することを促され、驚きとともに対象の新たな側面に会っていきけるのではないだろうか。こうした質的研究における分析のプロセスも、当事者の語りとともにあり、ともに生きようとする一つの在り方を示しているといえる。

語りの公共性に向けて

これまで見てきたように、面接の場で個人と個人が出会い、その関係性において語りが生じ、見いだされたことが、どのように人間の普遍的な知に貢献できるかという問いは、調査面接においても、臨床面接においても、共通して投げかけられている。人の心とは何であるのか、人が生きるとはどういうことであるのかという人間存在の本質に関わる問いについて、自然科学モデルでは、見いだされた知見がどれほど妥当性や信頼性をもって一般化でき、説明しうるのかということが重視されてきた。そのような科学的な知に対して、臨床心理学では、実践と研究をめぐる研究の在り方を問い、臨床の知 (河合, 1976) における普遍性の在りようを示すために、さまざまな方法論を模索してきた。

心理臨床では、セラピストとクライアントの出会いから生まれた「知」は、二者間にだけとどまるのではなく、専門家の間で共有される知として、事例研究という形でまとめられることで、公共性のなかに置かれることもある。心理臨床における関係性は、全くの個対個であるが、そうした個が「生きる」ことへのコミットを深めていくことで、その先には、人が「生きる」に関わる普遍性が立ち現れるとされる。たとえば河合 (1976) は、「一個人の全体性を損うことなく、その個人の世界を探究した結果は、臨床家が他の個人に接するときに共通のパターン、あるいは型を与えるものとしての普遍性をもつ」(p.10) と述べている。そしてそのような知を伝えていく事例研究では、『事実を伝える』ことよりも『心の動きが伝わっていく』というほうが大事 (河合, 1995, p.200) と述べられている。個々人の体験は個別的なものであるが、そ

うした個が「生きる」語りをともにするとき、聞き手自身のなかにも、「生きる」ことの心の動きが生じてくるというものである。そのように考えると、語りを継承するということは、単に、行動や思考のパターンや内容を伝えるのではなく、一人の人が「生きる」ことをめぐって語りを紡ぐというリアルな体験の軌跡を辿ることであり、そうしてまた受けとり手も、人が「生きる」ことの本質に触れていくことができるのである。

同様のことは、歴史学における「語り」の聞きとりの意義についても論じられている。証言として語られる個人の個別的な体験は、歴史的出来事 (fact) の証言としては弱点と見なされることがあるが、個別性に徹することで、証言の受け手 (聞き手) 自身もまた一人の個人として、生きている証との関わりを築くことができると指摘されている (田村, 2018)。ここに、「その主観性をどう解釈するかという受け取り手の責任」 (田村, 2018) が生じるのである。これと同様に、質的研究における調査面接においても、受けとり側の問題として個別の知をどのように受けとり、生きていけるかという、その責任と倫理が問われるのである。

語りが生まれる場における知は、いくら構造化された場といえども、人が「生きる」ことに関わる一つの語りの在りようとして捉えることができる。Frank (1995) は、われわれが物語と「ともに」あることによって生み出される知の在り方について、次のように述べている。すなわち、「物語とともに考えるということが意味しているのは、語りの倫理は、人々が意思決定するための明確なガイドラインや原則を提供しうるものではないということである。そこででもたらされるものは、物語がいくつかの方向へと導かれていくことを信任する許容力である」 (p.160, 拙訳)。そのように考えると、質的研究において生成される知は、ある現象を包括的に説明するものや他の当事者に当てはめて説明しうるものでもなく、また他者にとって目指されるべき目標や終着点でもない。一人の人の語りに耳を傾けることは、先人が生きた人生の軌跡を物語として辿ることであり、それは一つの人生の在りようをさし示すものになる。言い換えると、語り手と研究者によって生み出された語りの知は、他の誰かが生きるうえでのモデルになるというのではなく、そうした生の在りようを一つの物語として受け入れることによって、個別的な、かけがえのない「わたし」の生の多様性を認めることであり、それによって一人ひとりが生きていくうえで、新たな「わたし」の可能性に開かれていくことを意味するものである。

質的研究の調査面接において生成される語りもまた、個別性をともなうものであるが、質的研究において生成された知を、限定的な知と捉えるか、語りが生まれる場における知として捉えるかによって、生成された知への理解も変わってこよう。質的研究の質を評価する基準の一つに「転用可能性 (transferability)」 (Lincoln & Guba, 1985) があるが、これは生成された理論や見いだされた知を単に当てはめるのではなく、得られた知を新たな対象との出会いと対話に重ね合わせることにより、自分や他者への理解が深まるという形での可能性のことである (能智, 2006)。前述したように、当事者である「わたし」が語り手である「あなた」に向けて語る語りは、語り手を橋渡しとして、その物語を必要とする他の当事者である「あなた」にも語られ、受けとられていく。つまり「転用可能性」とは、一人の「生きる」体験が他者の生に語りかける営みであり、またそのときに、両者の「生きる」物語が響き合うという普遍性をもつものでもあるといえる。

さらに質的研究では、研究者が「今・ここ」で生成される語りを分析する過程を経ることに

より、二次的な理解の在りようが立ち上がってくる。この点について Willig (2001/2003) は、質的研究において生成された理論は、データについての唯一の真実というよりも、データのあつた読み方の一つであるとも述べている。遠藤 (2006) は、支援をする側である研究者が支援を受ける側について何とか理解しようと緻密な分析作業を通して悪戦苦闘した思考の軌跡と析出された概念は、その研究者なりの理解の枠組みを示すものとなり、同様の対象に接しようとする者に、その当事者ゆえのリアルな感覚をもたらしうと指摘している。これは、心理臨床の聴き語り、他の聴く者の心にリアライズ (皆藤, 2010) されるのと同様に、研究者が当事者の語りを聴き、それを語り継ごうとする過程も、当事者の支援に携わる者の心にリアライズされるといえる。こうした立場に立つと、質的研究において産出される知は、対象者やその現象を生きる個人を理解しようとする研究者——支援する側にいる「わたし」についての軌跡をさし示すものともなる。そしてそれを聴く者がその軌跡を辿り、心の中に動きが生じてくるとき、自らの支援者としての在りようを見つめ直すことへとつながっていくのではなからうか。

6. おわりに

本稿では、質的研究を語りの生成の場として捉えたときの臨床的な意義について、心理臨床との差異と重なりに着目して論じてきた。質的研究における調査面接と心理臨床面接には基本的な差異がある。調査面接は、研究を目的として行なわれるため、そこで生成される語りは、第三者に向けて伝達することが意識されるため、必然的にある種の公共性を帯びる。人が語るとき、目の前にいる「あなた」に向けて語られるが、特に調査面接での「わたし」の語りは、目の前にいる「あなた」に託しながら、その物語を必要とする他者である「あなた」——同じカテゴリに属する人や、同じ現象を生きる当事者や社会——に向けても語られるという公共性があるのである。臨床面接では、語り手は自身の抱える課題や問題のために、目の前にいるセラピストに向けて語られるため、そこでの語りは私秘的なものである。両者にはこのような差異があるものの、語りを語るという発話行為に着目するとき、語りは、聞き手との関係性によって「今・ここ」で共同生成されるという共通点をもっている。

河合 (2001) が、心理療法には「はじめ」と「終わり」があるが、個人の物語は死ぬまで終わることはない述べているように、人の物語は、絶えず新たな物語が生成され、紡がれていく。また Bakhtin (1984) は、物語論において非完結性 (unfinalizability) の概念を提唱しているが、これは、人は絶えず変化する可能性を秘めているため、語りは完結することではなく、完全に理解されることはないというものである。人の「体験」は理解しえないものであるが、心理臨床では、「体験の語り」に聴き入ることで理解しようとする (皆藤, 2010)。質的研究では、たとえば病いの物語を、病める身体を通して語られたものとして理解しようとする (Frank, 1995/2002)。われわれは語りを通して、語られたものから、その人の体験や「生きる」に関わる現象を理解しようと試みる。そうしてその語りも、他者によって生き直され、新たな物語を紡ぎはじめていく。

物語には本来的に非完結性があるということは、物語は語りえないものを常に含んでいるということでもある。「語りえなさ」に関して、宗教学者・哲学者の萩原 (2009) は、「責任 (responsabilité) は、迫害する者ではなく迫害を受ける者に生じる」という Lévinas (1974/1990)

の責任・主体論を援用しながら、個人が受難に直面したとき、「語りえないもの」を「語りえない」ままで開示し続けることが、普遍化・一般化による倫理的暴力を回避させていると述べている。この視点に立つと、調査面接や臨床面接における体験の「語りえないさ」とは、問いかけに対して「語りえない」痛みを引き受け、それでもなお他者に対して応答し、「語りえないこと」を開示していこうという、「わたし」の主体性の模索とその責任を示している。調査面接では、調査者/研究者は、「声」を聞き、受けとった者として、個と公共に対する責任から、語りの知を語り継いでいくのはもちろんのこと、同時に、語りえないことへの尊厳をもちながら、対象者の声にならない声に耳を傾けていくことが常に問われているともいえる。語りに関する研究では、こうしたパラドクスを生き延びていかねばならないのである。さらに、質的研究における「語りえないさ」については、臨床心理学的視点から、改めて考察を深めて論じていく必要がある。この点は今後の研究における課題としたい。

臨床心理学において、病める人や悩める人が「生きる」ことについてその物語を紡ごうとするとき、どのようにして理解への可能性を開いていけるのだろうか。臨床心理学における質的研究は、語りえぬことをも含む、語る人の「全存在に対する配慮」をもちながら、人が「生きる」ことへの理解につなげていくための、一つの道筋を示すものであるだろう。そして、語りの生成の場として質的研究を捉えたときに見えてくる、調査面接における語りのパラドクスと倫理性を常に問い続け、引き受けようとするところに、心理臨床面接での語りを聴く倫理性について考える知の地平が開かれていくのではないだろうか。

7. 引用文献

- Anderson, H. & Goolishian, H. (1992). The client is the expert: A not-knowing approach to therapy. In S. McNamee & K. J. Gergen (Eds.). *Therapy as social construction*. London: Sage, pp.25-39. 野口裕二・野村直樹（訳）（1997）. クライアントこそ専門家である——セラピーにおける無知のアプローチ. ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践. 金剛出版, pp. 59-88.
- Bakhtin, M. M. (1984). *Problems of Dostoevsky's poetics*. C. Emerson (Ed. & Trans.). Minneapolis: University of Minnesota Press. (Original work published 1963)
- Bakhtin, M. M. (1986). *Speech genres and other late essays*. V. W. McGee (Trans.). C. Emerson & M. Holquist (Eds.). Austin, TX: University of Texas Press. 新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木 寛（訳）（1988）. ことば 対話 テキスト（ミハイル・バフチン著作集 8）. 新時代社.
- Benveniste, É. (1966). *Problèmes de linguistique générale*. Paris: Gallimard. 岸本道夫（監訳）（1983）. 一般言語学の諸問題. みすず書房.
- Charmaz, K. (1990). 'Discovering' chronic illness: Using grounded theory. *Social Science & Medicine*, 30(11), 1161-1172.
- 遠藤利彦（2006）. 質的研究と語りをめぐるいくつかの雑感. 能智正博（編）. <語り>と出会う——質的研究の新たな展開に向けて. ミネルヴァ書房, pp.191-235.
- Flick, U. (2007). *Qualitative sozialforschung: Eine einföhrung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Verlag.
- 小田博志（監訳）（2011）. 新版 質的研究入門——<人間の科学>のための方法論. 春秋社.
- Frank, A. W. (1995). *The wounded storyteller: Body, illness, and ethics*. Chicago: University of Chicago

- Press. 鈴木智之 (訳) (2002). 傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理. ゆみる出版.
- 藤本 倫 (2003). 語り研究における「共同性」の検討. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, **90**, 43-69.
- Glaser, B. G. & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine. 後藤 隆・大出春江・水野節夫 (訳) (1996). データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか. 新曜社.
- 萩原修子 (2009). 語りえなさに耐える——水俣病事件がもたらした倫理と宗教の回路. 宗教研究, **83**(2), 577-600.
- 岩野卓司 (2010). 語りのポリティクスと他者——アルチュセール, バタイユ, レヴィナスをめぐって. いすみあ明治大学大学院教養デザイン研究科紀要, **2**, 3-10.
- 皆藤 章 (2010). 体験の語りを巡って. 誠信書房.
- 河合隼雄 (1976). 事例研究の意義と問題点——臨床心理学の立場から. 臨床心理事例研究, **3**, 9-12.
- 河合隼雄 (1992). 心理療法序説. 岩波書店.
- 河合隼雄 (1995). カウンセリングを考える (上). 創元社.
- 河合隼雄 (2001). 「物語る」ことの意義. 河合隼雄 (編). 講座心理療法 2——心理療法と物語. 岩波書店, pp.1-19.
- Koch, K. (1957). *Der baumtest: der baumzeichenversuch als psychodiagnostisches hilfsmittel*. 3 Auflage. Bern: Verlag Hans Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト第3版——心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房.
- Lévinas, E. (1974). *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*. The Hague: Martinus Nijhoff. 合田正人 (訳) (1990). 存在の彼方へ. 講談社.
- Lincoln, Y. S. & Guba, E. G. (1985). *Naturalistic inquiry*. Newbury Park, CA: Sage.
- 松島恵介 (2007). テキスト分析. やまだようこ (編). 質的心理学の方法——語りをさく. 新曜社, pp.160-177.
- McLeod, J. (1997). *Narrative and psychotherapy*. London: Sage. 下山晴彦 (監訳). 野村晴夫 (訳) (2007). 物語りとしての心理療法——ナラティブ・セラピーの魅力. 誠信書房.
- McLeod, J. (2000). *Qualitative research in counseling and psychotherapy*. London: Sage. 下山晴彦 (監修). 谷口明子・原田杏子 (訳) (2007). 臨床実践のための質的研究法入門. 金剛出版.
- 森岡正芳 (2002). 物語としての面接——ミメシスと自己の変容. 新曜社.
- 森岡正芳 (2005). 今なぜナラティブ?——大きな物語・小さな物語. 臨床心理学, **5**(2), 267-272.
- 森岡正芳 (2007). 物語の構合力. 臨床心理学, **7**(2), 257-261.
- 諸富祥彦 (2005). 体験という物語——体験療法の新しい展開. 臨床心理学, **5**(5), 705-710.
- 能智正博 (2006). “語り”と“ナラティブ”のあいだ. 能智正博 (編). <語り>と出会う——質的研究の新たな展開に向けて. ミネルヴァ書房, pp.11-72.
- 大山泰宏 (2003). 語りの布置の中の主体生成. 皇 紀夫 (編). 臨床教育学の生成. 玉川大学出版部, pp.82-100.
- 戈木クレイグヒル滋子 (2013). 質的研究法ゼミナール——グラウンデッド・セオリー・アプロ

- 一歩を学ぶ 第2版. 医学書院.
- 高橋 聡 (2012). 言語教育における, ことばと自己アイデンティティ. 言語文化教育研究, **10**(2), 37-55.
- 田村直子 (2018). 歴史の証人の語りにおける共感をよぶ力について——被爆者証言の分析を通して. 言語文化教育研究, **16**, 63-83.
- Willig, C. (2001). *Introducing qualitative research in psychology: Adventures in theory and method*. Buckingham: Open University Press. 上淵 寿・大家まゆみ・小松孝至 (訳) (2003). 心理学のための質的研究法入門——創造的な探求に向けて. 培風館.
- やまだようこ (2007). ナラティブ研究. やまだようこ (編). 質的心理学の方法——語りをきく. 新曜社, pp.54-71.
- やまだようこ (2013). 質的心理学の歴史. やまだようこ・麻生 武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也 (編). 質的心理学ハンドブック. 新曜社, pp. 24-53.
- 山口素子 (2001). 心理療法における自分の物語の発見について. 河合隼雄 (編). 講座心理療法第2巻 心理療法と物語. 岩波書店, pp.113-151.
- 山口智子 (2006). 研究としてのライフストーリー法. 臨床心理学, **6**(3), 391-396.

(臨床心理実践学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2019 年 8 月 30 日, 改稿 2019 年 10 月 29 日, 受理 2019 年 12 月 13 日)

語りの生成の場としての質的研究の臨床的意義

—臨床心理学における質的研究と心理臨床の差異と重なりに着目して—

野田 実希

本稿では、臨床心理学における質的研究の意義を検討するために、語りの生成の場として質的研究を捉え、心理臨床における語りの差異と重なりに着目した。まず、調査面接と臨床面接の基本的な構造の差異について概観した。次に、語るという発話行為に目を向けたとき、語りは聞き手と語り手によって共同生成されるという共通点がある一方で、調査面接においては、研究者の設定するテーマに沿って語り手を自己規定させるという権威性の課題が指摘された。しかし、語り手が自身の体験を他者に伝達しようとすることは、語り手が「わたし」としての声を見いだすとともに過去への応答責任をもつことでもあることから、調査面接だからこそ生まれる語りの公共性をもつ。研究者は、そうしたパラドクスと語りにおける倫理性をどのように引き受けていくかを常に考える必要があり、その問い直しの営みが、心理療法における倫理性につながることを示された。

Clinical Significance of Qualitative Research as a Field of Narrative Generation: Differences and Overlap of Narrative in Qualitative Research and Psychotherapy

NODA Miki

This paper considers qualitative research as a field of narrative generation and examines the significance of qualitative research in clinical psychology by focusing on the narrative differences and overlap between qualitative research and psychotherapy. There are a number of differences in the basic structure of survey interviews and clinical interviews. However, a common point between the two is that in the speech act of narrating, a narrative is co-generated in the relationship between the narrator and listener. In survey interviews, narrators are asked to narrate and identify themselves according to the researchers' interest, highlighting the authority in the survey interview. However, survey interviews also involve publicity when narrators convey their experiences to the listeners, trying to find their own voice and take responsibility for the past. Researchers must always consider how to handle this paradox and narrative ethics in qualitative research, which may lead to the ethical questioning process in psychotherapy.

キーワード： 質的研究、語りの倫理、公共性、調査面接と臨床面接の差異

Keywords: Qualitative research, Narrative ethics, Publicity, Difference between survey interviews and clinical interviews